

はしら、その二

松本康子

前回、"Use time wisely" を子育ての「はしら」の一つとした事を紹介した。その続きで、一体どのようにして子ども達に習慣として身につけさせようと考えたのか、まとめてみた。

子ども達ばかりでなく、夫までが私について語る時、かならず持ち出してくるのが、我が家の食生活についてだ。家族がそう言うのも無理のない事で、子ども達の1日は、「食事ありき」という私の方針で、何事も決められていたからだろう。

私は、五木寛之の小説「青春の門」の冒頭に出てくる九州の炭鉱町、飯塚市で生まれた。小学校に上がってすぐに神戸市へ引っ越したが、子ども心に、その文化の違いに表われる食生活から受けた、カルチャーショックを覚えている。

私の子ども時代といえば、日本中がやっと戦後から立ち直り、生活に活気を取り戻した頃だったと言われている。そして、その戦争を経験した母の大きな仕事が、家族の食事にあれこれ気を配ることだった事に尽きる、と何度も聞かされた。

九州に住んでいた頃の母は、かまどやしちりんで支度していた。食事なども、野原で摘んだつくしやセリをひたしにした物や、家や近所の畑から採れた野菜を中心に、夜はそれに鱈や鰯、秋刀魚などが食卓にのる程度だったが、一汁三菜だったように記憶する。肉と言えば鶏肉で、ぜいたくな食べ物は、毎朝、家で飼っていたにわとりが産んだ卵を、熱々のごはんに混ぜて食べた卵ごはんだったろうか。果物は、山の木になる栗や柿、いちじくなどを、季節ごとに自然の恵みからさずかった。おやつは、たまに母が作ってくれる油で揚げたオカキだった。調味料と言えば、日本食に欠かせない3種の神器しか知らなかった。

晩ご飯の支度に、よく、母と一緒に野へ出て、つくしや

セリ摘みを手伝うのが、子どもの仕事の一つだった。

父の仕事の関係で、小学校1年生の2学期が始まる前に、神戸市へ引っ越した。日本の大都市の一つであるその町では、生鮮食品は「市場」に行けば品数は豊富で、ショーケースに並んだいろいろな肉類を、生まれて初めて見た。食事に肉料理が増え、その上、それまで見た事も食べた事もなかったバナナなどのような南洋の果物があった。なま物は冷蔵庫（電気ではなく、水で冷やす保冷庫）で保存し、

煮炊きするのにガスコンロを使用していた。朝食は、卵ごはんから、食パンにバターやジャムを塗って食べ、牛乳を飲むという西洋風に変わった。おやつは、オカキに、小遣いで買う紙芝居の飴や駄菓子屋に並んだキャンディーなどが加わった。マヨネーズという、なんとも変わった味を持つ調味料を知ったのも、神戸に住み始めてしばらくしてからだった。

毎日、母と一緒に市場へついて行き、食べたい物を夕飯のおかずにしてもらうのが、子どもの楽しい仕事になった。



九州の片田舎と神戸の大都市で、食材や道具などといった大きな文化の違いを経験したが、それでも変わらなかったのが食事時間だった。

当時、時計というは貴重品の一種で、家にはしら時計が一つあれば十分だった。腕時計などは、父がしていた以外は、母が装飾品として持っただけだった。私が自分の時計を持たされたのは高校入学後で、それまでは、学校のベル以外で、生活の中に時計を意識した事がほとんどなかった。

小学校の頃の私の一日は、朝、母が用意するトーストにおいて学校の支度をし、給食室からただようおかずの匂いで昼時を知り、からすが鳴くからご飯食べに帰ろうとい